

- 1 派遣期日 令和5年11月17日（金）
- 2 派遣先 神奈川県川崎市立下沼部小学校
神奈川県川崎市中原区下沼部 1955
<https://kawasaki-edu.jp/2/204simonumabe/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究の取り組み

「主体的に動き出し、共に学びをつくりあげる子の育成」
～科学の“め”を育てる生活科・理科～

① 視察校における児童の実態

研究に先立ち、生活科・理科の学習アンケートや日々の授業の振り返りを行い、児童の実態を把握した。「主体的な学び」「対話的な学び」の側面から見た学校全体の傾向は以下の表のようになった。

	主体的な学び	対話的な学び
達成できている	・事象や材との関わりが大切であるという意識をもっている	・友達との関わりが大切であるという意識をもっている
課題になっている	・依然として教師主導の展開、発表児童の偏りがある ・先行知識に頼った発言が多く、授業の中での学びが見えにくい ・自分事として取り組む姿が見えにくい ・学ぶ意欲が維持する問題の見いだしが難しい	・対話的な活動場面の設定のみでは、考えを交流することに終始してしまい、学びの深まりが見えにくい ・生活科・理科で目指す対話的な学びの在り方を再考する必要がある

② 研究主題について

視察校は児童の実態をもとに主題を設定し、令和元年度から5年間にわたる実践研究に取り組んできた。「主体的に動き出す」とは「問題意識を持続させ、自らの学びを振り返り、解決に向けて主体的に学ぶ」こと、「共に学びをつくりあげる」とは「他者との対話を通して考えを広げたり深めたりし、共に学びを深める」ことである。このように、「主体的・対話的」の両側面から子どもたちの学びを保証することで、深い学びを実現し、資質・能力の獲得を目指している。以下が研究主題のイメージ図である。



研究主題のイメージ図（下沼部小学校ホームページより）

③ 3つの「科学の“め”」と5つの授業改善の手立て

副題に示されている「科学の“め”」には、3つの意味を包含している。子どもたちが3つの“め”を相互に連動させながら問題解決していくことが「主体的に動き出し、

共に学びをつくりあげる」姿を実現していくと考えた。以下の表内のA～Eは、3つの科学の“め”に沿った5つの授業改善の手立てを示している。

研究主題	科学の“め”	授業改善の手立てと具体例
Ⅰ 主体的に 動き出し	主体的に問題を 解決できる “芽”	A：材・事象との出会い方を工夫する場面をつくる (主体的に問題を解決する「きっかけ」をつくる) (例)数量・動作・位置・素材・季節・色・性質・手応え等の“違い”から矛盾や疑問、問題を見いだす
		B：繰り返し事象に働きかける場面をつくる (繰り返し関わることで主体的な解決を「実感」できるようにする) (例)主に予想の発想、実験方法の立案、実験・考察の場面 「もう一度」…確かめるために、違う方法で、対象物を変えて等
Ⅱ 共に学び をつくり あげる	解決の質を 高められる “目”	C：自分の考えを広げる目的をもった話し合いの場面をつくる (新たな考えや視点を得たり、自信をもったりすることで「解決の質を高める」ようにする) (例)「その可能性もあるね」「これもそうじゃない？」 自信をもつ、気付かなかったことに気付く、過去と比べる等
		D：自分の考えをまとめる目的をもった話し合いの場面をつくる (より確からしい考えや納得解をつくりあげる上で「解決の質を高める」ようにする) (例)「本当にそれでいいのかな」「そう考えられそうだね」 解決の方法を考える、結論を導く、本人の力を高める等
ⅠとⅡ を支える	自らの学びを 意味する “メ” (メタ認知)	E：自らの学びを意図的に振り返る場面をつくる (意図的に振り返ることで問題意識を明確にしたり、自らの学びを意味付けたりしていきながら、解決に向けて推し進めていくことができるようにする) (例)振り返りの場面で材や事象、考えを見直し、次への見通しをもつ

(2) 当日の研究授業について

① 「結果共有シート」の共有 →手立てB・C・D

学級全体で実験結果を考察し、結論を導く場面で、「本当に?」「何が根拠?」「どうだった?」等の問い直しに対し、児童は自分が見たいタイミングでGIGA 端末の共有データにアクセスし、必要な情報を探したり、考察を書き直したりしていた。結果と考察を論理的につなぐ根拠として活用できている。



② 書く時間の確保 →手立てA・E

個人やグループで実験の予想や計画の立案、学習の振り返りや感想を書く場面で、教師は児童に自分の考えを書き残す時間を十分に取っていた。今の時点で分かっていることと分からないことを可視化して整理、共有することで、全員が同じ見通しをもって次の学習活動に移ることができる。



4 感想

分科会では、学年の先生方から「結果と考察がつながっていることの大切さを伝える」「生活場面との関わりを見て教材研究を行う」「学校の中での問題や困り感」等、学校だからこそできる意識について、たくさん話を聞くことができた。特に、教材研究についての話から、令和の時代の目まぐるしい変化に合わせ、日常生活を深く掘り下げていくことの重要性を感じた。また、GIGA 端末の使用がますます期待される。教員も率先してICT 機器を体感する機会が必要である。今後も試行錯誤を学びにつなげる毎日を大切にしていきたい。